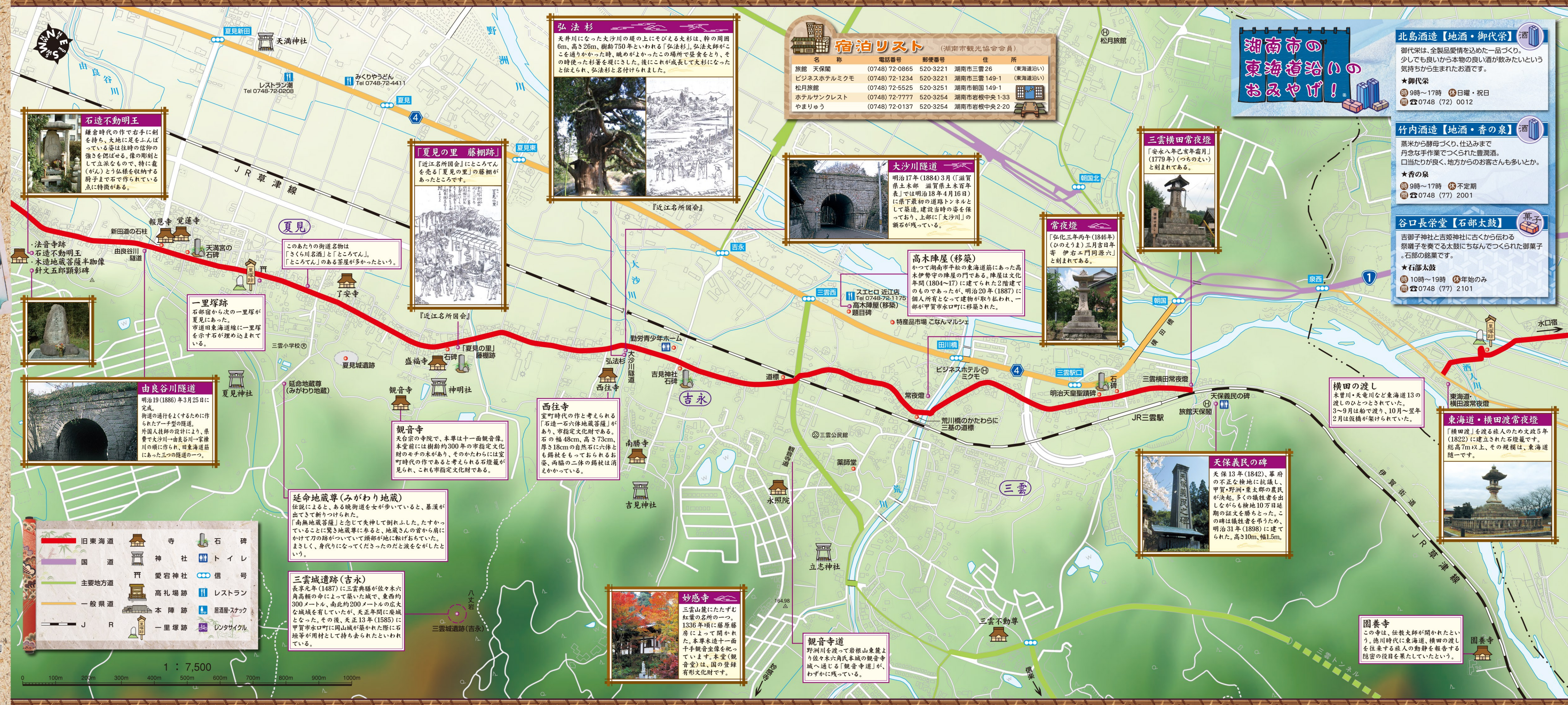


古人の足跡を訪ね

石部宿

東海道をいく 湖南の旅



東海道五十三次 石部宿

石部宿 (いしべしゆく) は東海道51番目の宿場。京都まで1日の行程にあり、現在の滋賀県湖南市に位置しています。

宿の成立は、慶長6年(1601)に東海道各宿に朱印状が発せられ伝馬徴発の定書が下付された時点とする説とされています。宿場内には、本陣2軒(小島本陣、三大寺本陣)、旅館32軒を含む458軒が街道の両脇約1.6キロメートルにわたって建ち並んでおり、1843年には、中央に宿役人の詰める問屋場(とんやば)と高札場がありました。

幕末には征夷大将軍徳川家茂が上洛の際に(1863年)、新撰組局長近藤勇も江戸下向の際に(1864年)それぞれ小島本陣に宿泊し、のちに最後の征夷大将軍となる一橋慶喜は上洛の際小島本陣に小休止(1863年)しています。現在、湖南市雨山文化運動公園内にある東海道石部宿歴史民俗資料館に宿帳などの歴史資料が展示されています。

また、石部は、帯屋長右衛門と信濃屋お半の悲恋物語、『桂川連理桐(かつらがわれんりのしがらみ)』の舞台となった宿で、歌舞伎や人形浄瑠璃で今もなお、全国各地で演じられています。

